

島崎藤村『新生』における「告白」の意義

細川 正義

序

藤村が「ルウソオの「懺悔」」に見出したる自己」を書いたのは、明治四十二（一九〇九）年三月だが、その中で「懺悔」（告白）は「失望もすれば落胆もする弱い人間の一生の記録」であり、そのへ人間への「告白」による生肯定の姿勢の獲得と、それまでの「束縛を離れて」「自由に考へ」「自由に行ふ」ことの意義を教えられたと書いているが⁽¹⁾、一二十三歳の時はじめてルソーを読んで以来その影響を受けており、それを中心に藤村文芸は展開していったといってもよい。

そしてそれは初期の詩業における恋愛や自然美への讃歌など主情的表現スタイルにおいてまずうかがえるが、やはり、そのことがより明白に用いられてくるのは明治三十九年の『破戒』であり、以後『春』『家』『桜の実の熟する時』『新生』へと展開されていく。特に『新生』では第二巻七十五で節子が岸本捨吉からもらった「ルウソオの懺悔録」を例に「真の幸福」について述べる箇所が描かれている。そして、自らの父の狂熱のうちに生涯を終えた壮絶な戦いの人生をもとにして描いた『夜明け前』、『東方の門』に至るまで、藤村文芸全体が「告白」とは切り離して考えられないともいえるのである。

その中でまず注目されるのはやはり『破戒』である。『破戒』は主人公瀬川丑松が被差別部落出身である素性を父の戒めによって隠蔽してきたが、それを告白することで精神の牢獄から解放されて自由を獲得していく物語である。丑松が、人生の先輩とも師とも慕う猪子蓮太郎が書いた『懺悔』を読んで深い感銘を受けて自我に目覚めていく過程は、藤村自らのルソーの『懺悔録』を読んでの影響体験を踏まえているといっても良い。そして、『破戒』以後も藤村はこの自己告白のスタイルをとりながら創作世界を展開していくのであるが、その中でも藤村自身の人生最大の危機ともいえる秘密と心奥における呪縛と、そこからの解放を期して描いたのが『新生』である。本稿ではこの『新生』にあらわされた「告白」の意義について考察していきたい。

一

『新生』はいうまでもなく藤村の兄広助の次女こま子とのインセストと、それによる妊娠、出産にまつわる秘密を「告白」することをベースに展開された作品である。

簡潔にその経緯を示すと次のようになる。

- ・ 明治四五（一九一三）年六月頃、藤村とこま子の関係が始まる。大正二（一九一三）年正月、こま子から妊娠を告げられる。（『新生』第一卷十三）。
- ・ フランスへの旅——三月二十五日、新橋出発。四月十三日、エルネストシモン号で神戸を出発。大正三（一九一四）年七月下旬、第一次世界大戦勃発。八月末～十一月中旬、戦火を避けてリモオジュに滞在。大正五（一九一六）年四月二十九日、パリを出発。七月八日、東京着。
- ・ 大正七（一九一八）年四月五日、こま子の母あさが死去。同日、『新生』起稿。五月一日より十月五日、朝日新

聞連載。第二部は、大正八（一九一九）年四月二日より十月二十三日まで朝日新聞連載。

この藤村の『新生』とそれにまつわる出来事に対して後年芥川龍之介が『或る阿呆の一生』のなかで「『新生』の主人公ほど老獪な偽善者に出会ったことはなかった」（四十六「嘘」）と批判したことは良く知られている。芥川は「ルツソオの懺悔録さへ英雄的な嘘に充ちてゐた。殊に『新生』に至つては」⁽²⁾として、嘘に満ちた老獪な偽善者の作品であると断定しているわけであるが、はたして、本当に芥川が非難したように藤村がこの『新生』で「嘘」に充ちた虚偽の告白をしたのかといえ、そうではない。例えば、『新生』第二巻百二十一で、岸本が小説として世間に公表した後の兄の言葉として、「黙つて置きさへすれば最早知れずに済むことではないか。」と言わせたところがある。こま子の父広助は、弟藤村と娘との出来事を一切自分の胸にしまつて処理をした、それにもかかわらず作中の義雄の言葉のように、世間の避難が集中するであろう、或いは文壇での立場をも失うかも知れない告白をあえて実行した心情を考えれば、それは芥川が言うような嘘に充ちた老獪な偽善者としての姿ではなく、もっと切実な、そして真実な心を込めて告白を実行したのではないかということも考えられるのである。ちなみに『新生』第二巻百二十一では先の義雄の言葉に続けて「しかし岸本はもつと広い自由な世界をめがけて脇目もふらずに急がうとした。」と書き留めている。この「もつと広い自由な世界」とはどのような方向を示しているのか、そのことをふまえつつ、この『新生』の「告白」の真意を探っていくことにする。

この『新生』の「告白」の有り様についてはこれまでも多く論じられてきたが、そのたびに取り上げられるのが、先の芥川の昭和二年の『或る阿呆の一生』の批判に答える形で藤村が同年の十一月に発表した「芥川龍之介君のこと」である。そこには次のように書かれている。

・ 一体にあの遺稿は心象のみを記すにとどめたやうなもので、その他を省いたやうな書き振りであるが、こゝに引いた『新生』とは私の『新生』であるらしく思はれる。私はこれを読んで、あの作の主人公がそんな風に芥川君

の眼に映つたかと思つた。

・『ある阿呆の一生』を読んで私の胸に残ることは、私があつた『新生』で書かうとしたことも、その自分の意図も、おそらく芥川君には読んで貰へなかつたらうといふことである。(中略) 芥川君ほどの同時代の作者の眼にも無用の著作としか映らなかつたであらうかと思ふ。⁽³⁾

次代の作家であり、大正時代に最も活躍した作家芥川に『新生』で書かうとしたことも、その自分の意図も理解してもらえず、老獪な偽善者として評価されなかつたことにかなりショックを受け無念に思つていたのであらう事は、この一文が、『或る阿呆の一生』発表のすぐ後に発表されていることから推察出来る。その藤村の心情は、実は『新生』の中にも次のような描写によつて窺うことが出来るのである。

「まあ、人の噂も七十五日ツて言ひますから、今に何処かへ消えちまふ時もまゐりませう——もう斯様な話は止ませう。」

輝子は嘆息するやうに言つて、襦袢の袖で涙を拭いた。この輝子の前に、岸本は自分の書いたものをよく読んで見て呉れといふより他の挨拶の仕様も無かつた。(第二卷百十五)

作者の立場で推測するなら、『新生』第一巻を発表して、世間からかなり厳しい批判を受けたことが考えられるし、何よりも兄広助から義絶されたことは、当然とはいへ痛恨の思いでもあつたであらう。輝子は節子の母であるが、その輝子に対して「自分の書いたものをよく読んで見てくれ」と思う気持ちは、それは作者藤村の世間の読者に対する思いでもあつたと想像することが出来る。そのことが、この芥川への心情にも重なるというように考えられるのである。

そして更に「芥川龍之介君のこと」では、

『果して「新生」はあつたであらうか。』

斯う芥川君は『侏儒の言葉』の中で『新生』の主人公に、つゞいては作者としての私に問ひかけてゐる。芥川君は懺悔とか告白とかに重きを於いてあの『新生』を読んだやうであるが、私としては懺悔といふことにそれほど重きを置いてあの作を書いたのではない。人間生活の眞実がいくら私達の言葉で盡せるものでもなく又書きあらはせるものでもないことに心を潜めた上での人で、猶且つ私の書いたものが嘘だと言はれるならば、私は進んでどんな非難に當りもしようが、もと／＼私は自分を偽るほどの余裕があつてあの『新生』を書いたものでもない。當時私は心に激することがあつてあゝいふ作を書いたものゝ、私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。荒れすさんだ自分等の心を掘り起して見たら、生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る日も来たと言つて見たいつもりであつた。あれを芥川君に読み返して貰へる日の二度と来ないことを思ふとさみしい。⁽⁴⁾

と述べ、芥川が『新生』と『新生』の作者に対して「老獪な偽善者」と批判したことを否定しているのである。

この藤村の切実な芥川に対する文章を読むと、芥川が、『新生』は藤村自らのインセストの告白であり、にもかかわらず特に第二巻に至つてはそれをあたかも愛の形として肯定するかのやうに描いていることを批判したことに対して藤村は、『新生』はその出来事の告白が主眼であつたのではなく、書きたいことは別なところにあつたのであり、それは「私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた」という表現が端的なやうに、大正中期の深いデカダンスの時代に於いて、自らの体験の告白という犠牲を強いてでも、その時代の暗闇からの脱出を企図した試みにつながるものであつたということを主張していることが推測出来るのである。

換言すると、藤村が『新生』を通して告白し、主張しようとしたことは、芥川が問題にした藤村における「事実」とそれに対する自己の姿勢の事ではなく、当時の藤村に意識されていた「心に激する」心情をもって時代へ鶴嘴を打ち込もうとしたことであり、こま子との關係を描いてはいるが、それはその出来事を通して大正時代の深い退廃とデ

カダンスにあつての「人間生活の眞実」を問い、主張することが目的であつたということであることが推測されるのである。そうした作者の心情を『新生』において改めて探つてみるなら、第二巻百三十九で、

「あ、あ、——こんなに親戚があつても、俺の心を汲んで呉れるやうな人は居ないのか。」

と言ひながら岸本は起つて行つて茶道具を持つて来た。

「しかし、無理もないねえ。俺が何をして来たのか、奈何いふ心持で居るのか、親戚は知らないんだからねえ——」

と岸本に語らせており、また第二巻百十一でも、

岸本は、あの病人の個性といふものをよくも見究めずに唯病氣のみを診断しようとする医者^のやうな人達から一

口に自分の行為^{おこない}を審^{さば}かれることを非常に残念に思つた。

と思わせている点が注目される。ここで想起されるのは、芥川が拘泥した「事実」と、藤村が『新生』執筆以来繰り返し主張している「眞実」との問題が考えられるが、このことについて例えば太宰治は『女の決闘』のなかで次のように記している。

(略) 自分のもので無い或る卑しい想念を、自分の生れつきの本性の如く誤つて思ひ込み、悶々してゐる氣弱い人が、ずるぶん多い様子であります。卑しい願望が、ちらと胸に浮ぶことは、誰にだつてあります。時々刻々、美醜さまざまの想念が、胸に浮んでは消え、浮んでは消えて、さうして人は生きてゐます。その場合に、醜いものだけを正体として信じ、美しい願望も人間には在るといふ事を忘れてゐるのは、間違ひであります。念々と動く心の像は、すべて「事実」として存在はしても、けれども、それを「眞実」として指摘するのは、間違ひなのであります。眞実は、常に一つではありませんか。他は、すべて信じなくていいのです。忘れてゐていいのです。多くの浮遊の事実の中から、たつた一つの眞実を拾ひ出して、あの芸術家は、權威を以て答えたので

す。検事も、それを信じました。二人共に、真実を愛し、真実を触知し得る程の立派な人物であつたのでしよう。(5) 太宰は、この作品に於いて「真実」と「事実」はともすれば同じものと見なされがちであるが、しかし、両者は全く違うし、「真実」以外は信じなくとも良いとまでのべている。

太宰は初期の短編「葉」においても

たった一行の真実を言いたいばかりに百頁の雰囲気をこしらへてゐる。(6)

と述べ、「真実」を語ることの困難さと、一方で「真実」を語る事へのこだわりを述べている。太宰のこの「事実」ではなく「真実」を語ることへのこだわりは「文芸」の使命であるとも言えようが、藤村の『新生』は太宰も鮮明に問うた「一つの真実」への確信において「あれ荒んだ」「時代」に「活き返る日」の望みをきびしく問いかけようとしたということを理解することが出来る。そしてまたそのことに誠実に問いかけようとした藤村ゆえに先の「芥川龍之介君のこと」では「芥川君の悩んだ懷疑は私達と同じ時代の人の懷疑だ。その苦悶も私達と同じ時代の人の苦悶だ。あれほどの悩みを悩んで行つた人に対して、私達は哀惜のこゝろを寄せずにはゐられない。」と続け、芥川の苦悶の「真実」にも眼を注ごうとしているのである。芥川の時代への「苦悶」に「哀惜のこゝろを寄せ」る藤村の中には、自らもまた時代のデカダンスの中で思いがけず引き起こしてしまったこま子との出来事に対して誠実に問いかけ、自分の弱さゆえに引き起こした不始末として留めておくのではなく、時代と人間の相克における共通の問題として問い詰めようとする「真」を強く実感している心情を窺うことができる。太宰の言を待つまでも無く、いかに「真」をつくして語っても真実は事実簡単に置き換えられてしまうその困難の中で「真」を告白する唯一の手段として藤村は「文芸」を選んだのである。『新生』はそうした作者の「真」を描こうとする意図に立脚した岸本像の形象においてこそ問われるべき作品であるといえよう。

一一

藤村が『新生』執筆によって告白しなければならなかった一つとしてはすでに平野謙によって『新生』一篇が、いわゆる懺悔の希求や私小説的文学精神につらぬかれた諸作品とは、はるかに距つた地点に佇んでいることだけは動かせぬ事実であろう」として指摘されている金銭の問題があることは周知である。平野謙は次のように述べている。

「矢張、金の問題が附いて廻る——どうも仕方がない」と捨吉にひとりごちさせた問題は重要である。『家』においても「金の問題」には大なり小なりすべての人物がなやまされ、彼らのたどるそれぞれの運命も、主としてその問題に左右されている。『新生』においても事情はかわらぬ。いや、それはもっと特殊な陰翳をおびて、主人公たちの暗鬱な運命を彩り、支配する。

手の描写の前には、捨吉が義雄と嫂との両方から「書付」を見せられる叙述がある。また、手の描写のすぐ後で、捨吉は「姉さん、私も帰って来たものですし、今日から斯の家は私にやらせて下さい」と嫂に言っている。ふたつの「書付」の内容については具体的にふれられていぬが、それが三年間の留守を守ってきた義雄夫婦の出納簿の類だったことはあきらかだ。「私にやらせて下さい」という言葉の意味も明瞭である。すなわち、「誰にも知れないやうに自己の罪迹を葬らうとして居る」捨吉はただ黙って、「自分の弱点を握つて居る」「掛引の強い」義雄の手に対し「押頂いても足りないほど感謝すべき」であつた。

『新生』第二卷二十三、二十四を踏まえての指摘であるが、そうした金銭の問題と、帰国後再発したこま子との肉體關係を踏まえて平野は更に、

恋愛からの自由と金銭からの自由とを現実化する唯一の手段として、捨吉は自己の体験の作品化について真剣に思考をめぐらした。というより、捨吉の自由要望の声はそのまま「一切を皆の前に白状したら」という声にまっすぐつながるものであった。

と述べている⁽⁷⁾。藤村がこの『新生』を書かざるを得なかったやむにやまれない事情として作品と作者を綿密に比較考察した論は明快で、以後の『新生』論もこの平野論を踏まえて展開していくわけであるが、確かに一つの要素としてこのことを無視する事は出来ないにしても、しかし、例えば執筆中の藤村の次のような言葉を振り返るなら、そうした藤村自身の実生活における「恋愛」と「金銭」からの自由を求めてということよりもっと切実な必然性を求めなければならぬと考えるのである。大正七年末の「熱い汗と冷たい汗」と題した次の文章である。

今年自分の仕事としておもに『新生』の第一巻を書いて暮した。(略)

四月からずっと自分は『新生』に取りかゝつて暑いさかりの間も休みなしに筆を執つて暮した。毎年言ふことながら、あの梅雨の晴れる頃あたりは何といふ暑さだったらう。でも今年は割合に梅雨の時季が短かかったので、長い仕事をするには助かった。それから夏季の創作は暑くてもなんでも午前中に限るといふ経験をも得た。自分は三人の子供を養ひながら筆を執らなければ成らないといふ特別な境遇の下にあつたから、朝の中だけ訪問の客を受けることにして、日中は殆んど誰にも逢はずに『新生』を書いた。それでも六ヶ月の余もあの作にかゝつた。熱い汗と冷たい汗とを流しつゝけた。⁽⁸⁾

「六ヶ月の余もあの作にかゝつた。熱い汗と冷たい汗とを流しつゝけた」とあるように、長い時間相当苦しみながら、また自己と真剣に対峙しながら創作を続けてきたことが彷彿される文章である。恐らく「恋愛」と「金銭」からの自由という意図、即ち秘密として「家」の内部で隠蔽してきたことから告白へという目的と、それに対する一族と社会からの裁きという点において言うなら、『新生』は上巻十三の節子が妊娠を告げるあたりから決定的なものが下され

たとも推察できる。第一巻十五の「嵐は到頭やって来た」の一文がその一連の出来事が開始したことを暗示しているとも言えよう。しかし、藤村はその「告白」の後「六ヶ月の余も」辛苦しながら『新生』執筆を続けるのであるが、そこにある作者としての誠実、そして作者としての『新生』執筆の真意は何かを更に明らかにする必要がある。そのことと関連する描写として次の箇所が挙げられる。

「父さんは何しに仏蘭西へ行つたの——」

斯の泉太の間には、岸本も詰つてしまった。屋外の方では遽に蛙の鳴出す声が聞えた。岸本は子供等の顔を眺めながら、旅の空では殆んど聞かれなかった蛙の声に耳を澄ました。(第二巻二十六)

従来『新生』は第一巻巻から十か月の期間を経て書かれた第二巻との間に作者のテーマの変化を前提にして読む読み方が多くなされてきた。そのことは拙稿でかつて次のようにまとめたことがある。

二部形式よりなる「新生」は(略)従来作品世界が「新生」発表に至るまでの作者の心情に深く立ち入っている形式と、上巻で新生事件の事実上の告白を成した作者の、下巻発表に至るまでの十ヶ月間の沈黙を取り上げて、上巻から下巻へかけての主題の転位を指摘する論は少なくない。瀬沼茂樹氏の、上巻を「懺悔の書」、下巻を「福音の書」とするのはその端的な論である。或はその傾向の一部を紹介すれば、笹淵友一氏の「第一巻の世間に対する恐れと比較すれば／確かに居直りの印象さえ与えかねない」という指摘があるように、上巻が「恋愛からの自由、金銭からの自由」(平野謙)等の「心理的負担」(笹淵友一)からの解放、「生活者としての自己の立て直し」(山田晃)を意図したものの、もしくは「道德上の過失に対する苦痛」(吉田精一)、「宿命的罪業に苦しむ苦悩の姿」(實方清)の描写をもとに「贖罪の行為に擬せられ」(伊東一夫)たものであり、下巻は「第一部の発表後の反響をも踏え」(佐藤泰正)た上で、恋愛の積極的肯定(吉田、笹淵等)という「自己肯定」をもとに、自己告白による運命苦からの自己救済、「芸術家としての自己救済」(山田晃)といったモチーフの転位が多

く指摘されてきている。(9)

しかし見直す必要があるのは、そのような形で第一巻から第二巻へのテーマの変更を読み取る読み方でよいのかどうかである。たとえば先の第二巻二十六の引用の箇所から言うと、泉太の問いを示した作者の心情に、第一巻で詳しく示した渡仏の意味とそれを踏まえて『新生』第二巻を通して懸命に書いていこうとしていることを十分に理解しても、読者に向けての心情を読みとることも可能でないかと考えられる点である。そのことを推測させる箇所として第二巻百十一と百三十九の次の描写が注目される。

・節子ゆゑに、岸本はあれほどの苦惱を得たのだ。節子ゆゑに、岸本はあれほどの哀憐あはれみを感じたのだ。罪過も、旅も、それからまた互いに一生を託するやうな悲哀かなしみも——一切は実に節子その人を対象にして起つて来たことだ。

岸本は、あの病人の個性といふものをよくも見究めずに唯病氣のみを診断しようとする医者いしやのやうな人達から一口に自分の行為わざを審さかれることを非常に残念に思つた。

(第二巻百十一)

・「あ、あ、——こんなに親戚があつても、俺の心を汲んでくれるやうな人は居ないのか。」

と言ひながら岸本は起つて行つて茶道具を持って来た。

「しかし、無理も無いねえ。俺が何をして来たのか、どういふ心持で居るのか、親戚は知らないんだからねえ

——」(第二巻百二十九)(傍線筆者)

傍線の箇所は岸本捨吉が書物を通して告白してきたことの真意が社会にも親戚にも理解されず、ただ犯した「自分の行為を審」くことしか出来ないことへのもどかしさであり残念な思いを示した箇所であるが、そこに『新生』執筆の藤村の心境を重ねることもできよう。しかも作中の岸本の作品も同じであるが、『新生』が新聞小説として毎日読まれ、反響が寄せられている状況を推測すれば、その無念さはなお一層のものであつたことが推察されるのである。文章の表面から「事実」だけを読む読者に対して、その犯した事実の告白のうちに込めている「真実」がなかなか伝

わらないもどかしさ、無念を痛感しながら「熱い汗と冷い汗」を流し、それでも懸命に「真」を伝えようとしている作者の姿を彷彿することが出来るのである。

その作者が伝えようとした「真」を探る手掛りとして、作中岸本捨吉の旅立ちを伝える箇所次の描写があげられる。

「友人は好いことを言つて呉れた。是以上の死滅には自分は耐へられない——」（略）「可哀さうな娘だなあ。」

思はずそれを言つて、彼ゆゑに傷ついた小鳥のやうな節子を堅く抱きしめた。

「好い事がある。まあ明日話して聞かせる。」

その岸本の言葉を聞くと、節子は何がなしに胸が込上げて来たといふ風で、しばらく壁の側に顔を押へながら立つて居た。とめども無く流れて来るやうな彼女の暗い涙は酔つて居る岸本の耳にも聞えた。（第一巻二十八）

岸本が「好い事がある。まあ明日話して聞かせる」と告げるのに対し、節子は「何がなしに胸が込上げて来た」感情で「とめども無く流れて来る」「暗い涙」を流している場面は哀感が漂う。例えば、節子が岸本に妊娠を告げる第一巻十三では「彼女は思い屈したやうな調子で」話しているのに対して、岸本には「避けよう避けようとしたある瞬間が到頭やって来たやうに、思わず岸本はそれを聞いて震えた」と描かれている。妊娠という「事実」がいかにか二人に重くのしかかっているかを推測させる場面であり、特に、岸本の反応には節子の感情を省みないエゴイステイクな態度がうかがえ、『新生』が批判される際に引き合いに出される箇所でもある。そして第一巻二十八の箇所でも酒に「酔つて」その勢いで、自分の旅立ちを「好い事がある」と伝えようとしているところには、更にエゴイステイクな面が浮んで、批判されるところであるが、しかし、この場面で、より注目しなければならないのは岸本がそのフランスへの旅立ちを「是以上の死滅には自分は耐へられない」としている点である。恐らく、作者にとつては、自らが犯した過ちを深い悔恨の思いで認識している心情をあえてエゴイストとして批判の目にさらす形で描写したとも取れ

るが、そうした事実との関係を素材にしつつ、この箇所でそのことを第一の問題にすることよりもむしろその心理の内奥で「これ以上の死滅には」「耐へられない」と実感している点を深く問うて見る必要があるかと考えるのである。

この点にたつて作品を眺めてみたとき、作品の序で次のような主人公の心情が強調されている点が注目される。

生存の測りがたさ。曾て岸本が妻子を引連れて山を下りようとした頃に斯うした重い澱んだものが一生の旅の途中で自分を待受けようとは、奈何して思ひがけよう。中野の友人にやつて来たといふやうな倦怠は、彼にもやつて来た。曾て彼の精神を高めたやうな幾多の美しい生活を送った人達のこと、皆空虚のやうに成つてしまつた。彼はほとく生活の興味をすら失ひかけた。日がな一日侘しい単調な物音が自分の部屋の障子に響いて来たり、果しもないやうな寂寞に閉される思ひをしたりして、しばらくもう人も訪ねず、冷い壁を見つめたまゝ、坐つたきりの人のやうに成つてしまつた。これはそもそも過度な労作の結果か、半生を通してめぐりにめぐつた原因の無い憂鬱の結果か、それとも母親のない幼い子等を控へて三年近くの苦難と戦つた結果か、いずれとも彼には言ふことができなかった。(序の章五)

このとき既に節子との関係は進行していたであろうが、その時期が深い倦怠と、空虚と寂寞におかされていた時期であつたことが序では執拗に強調されている。そして更に、彼はその時期と青年時代とを引き比べて、あの頃は

「皆一緒に学校を出た時分——あの頃は、何か面白さうなことが先の方に吾儕を待つて居るやうな気がした。
(略)」

と言ひ、それに比べて今は、

「左様サ、是れが人生だ。」と昔は冷静な調子で言った。「僕は左様思ふと変な気のあることがある。」

「もうすこし奈様かといふことは無いものかね。」

と岸本が言ふと、足立はそれを引取つて、

「そんなに面白いことが有ると思ふのが、間違ひだよ。」(序の章四)

と友人の口を通して語らせている。かつては未来に希望がもてたのに対して、今は前途に「面白いこと」を望むことすら出来ないときであることを示している。しかもここは、岸本自身でなく友人に語らせていることに更に周到な計画が施されているといつてよく、第三者を介入させることで、まさに作中のこま子との関係が生じた明治四十五年前後がそういう暗い時代であつたということを示している箇所でもある。

この時代に特筆しなければならないのは明治四十三(一九一〇)年五月に端を發した「大逆事件」である。幸徳秋水の盟友堺利彦が「冬の時代」がきたと痛恨したようにまさに国中が震撼し、深い恐怖と沈黙の中に沈滞していった時代であつた。この「大逆事件」の背景に日露戦争後の時代の混沌があつたことは言うまでもないが、そのことは藤村の『家』とも深く関連する。『家』の後編が『犠牲』と題して「中央公論」に發表されたのは明治四十四(一九一一年一月と四月であるが、その一月發表の「三」で主人公三吉が姪のお俊の手を握る場面を描いている。そして同じ「三」に

「すっかり私は叔父さんの裏面を見ちやつてよ——三吉叔父さんといふ人はよく解つてよ、」斯う骨を剝るやうな

姪の眼の光を、三吉は忘れることが出来なかつた。それを思ふ度に、人知れず彼は冷い汗を流した。⁽¹⁰⁾

とあり、ここでも「冷い汗」を流している。三好行雄は『家』論において、

「家」の主題は、というより、この小説に現れる〈家〉の意味は、ふたつの側面がある。ひとつは人間を外部から規制する機構としての家であり、他のひとつはむろんそれと微妙にからみあいながら、人間を内部から破壊させる生理としての家である。前者は運命共同体としての大家族制度の本質にほかならぬが、藤村はそうした共同体の内部に、閉鎖的な伝承関係を編んだ家系の宿命を發見したのである。放縦な血の呪いであり、そのゆえの人

格的頹廢の危機である。この小説の登場人物はつねにその陰湿な宿命からまぬがれない。達雄も正太も宗蔵も、そして三吉さえもおなじ血の呪いによって破滅に瀕する。実にも森彦にも、へ旧家に生まれたものでなければ無いやうな頹廢の氣^レが絶えず付きまとうのである。⁽¹⁾

と指摘しているが、まさに深い時代のデカダンスに身を沈めながら、藤村自身解決しがたい「暗い宿命」としか言いようの無い「人間を内部から破滅させる生理としての家」を見据えながら「冷い汗」を流して立ち止まらざるをえなかったのが明治四十三年以降の作者の実情でなかったかと推測される。その退廢と停滯の中で最も恐るべきものとして生じたのが姪とのインセストであり、そう考えれば「どうしても斯の伋ぢや、僕には死に切れない」(序の章四)「是以上の死滅には自分は耐へられない——」(第一卷二十八)という岸本の痛恨は痛切に響く。『新生』はまさにそうしたインセストにまつわる藤村の痛恨をじつと見据えて書いた世界であり、そこに作品を通して作者の「真」が響くのである。

三

『新生』という作品は確かに芥川が「老獪な偽善者」と批判したような展開をした作品である。例えば、岸本がフランスに滞在して一年が過ぎ、次第に日本への郷愁もつものようになったころの様子を次のように記している。

なつかしい故国の便りは絵葉書一枚でも実に大切に思はれて時々旧い手紙まで取出しては読んでみたいほどの異郷の客舎にあつても、姪から貰った手紙ばかりは焼捨てるとか引裂いてしまふとかして、岸本はそれを自分の眼の触れるところに残して置かなかつた。(第一卷八十七)

そして「あれほどの深傷^{ふか}を負はせられながら、彼女は全く悔恨を知らない人である」「同時に言ひあらはし難い恐怖^{おそれ}

をすら感ずるやうに成つた」(第一卷八十七)として、依然として岸本を頼りにしてしばしば手紙を書いてくる節子の気持ちを理解しようとせずむしろそのような節子の様子に「言いあらわし難い恐怖おそれをすら感」じるのである。そしてその頃起こったパリ戦争の戦火を逃れてフランス中部のリモオジュへ移動することになるが、そのリモオジュで、
・丁度死者のための大きな弥撒メッセが行はれて居るところであつた。ギエンヌ河の岸に添うて高く岡の上に立つその寺院は、ゴシック風の古い石の建築からして岸本の好ましく思ふところで、まるで樹と樹の枝を交叉した林の中へでも人つて行くやうな内部の構造まで彼には親しみのあるものと成つて居た。よく彼はそこへ腰掛けに來た。その日もあの亡くなつた老婦人の生涯を偲ぶうためばかりでなく、しばらくその静かな建築物の中で自分のたましひを預けて行くことを楽しみにした。あだかも樹陰に身を休めて行かうとする長途の旅人のごとくに。(第一卷百三)

・岸本の心は慷慨な口調を帯びた僧侶の説教の方へ行き、王冠の形した古めかしい説教台の方へ行き、その説教台と相對した位置にある耶穌の架像の方へ行つた。しかし彼は何時の間にかそんなことを忘れてしまつた。(中略)
唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、仮令たとへ僅の間なりとも「永遠」といふものに対し合つて居るやうな旅人らしい心持に歸つて行つた。(第一卷百四)

といった嚴かな宗教的雰囲気の中での体験を機に思いがけない心境の変化がもたらされ、「再生の芽を古い古い羅馬旧教の空気の中にすら見つけることが出来るやうに思」(第一卷百二十三)うようになり、更にそこに「お前も支度したら可いではないか」というささやきを聞き帰国までも促されていくのである。言い換えれば、この岸本の帰国を決心する経緯には、彼を直接フランスへいざなつた節子とのインセストにまつわる問題はあまり考慮されずに、特にリモオジュでの宗教的体験を踏まえたうえでの岸本の内面の変化を中心に展開されているのであり、芥川の批判もそうであるが、特に新聞小説として、事の顛末に強い関心を抱く読者においては岸本の帰国の決心について強い批判を

抱くものが少なくなかったであろうことは想像に難くない。

換言すれば『新生』を書く作者の心境において考えるなら、『家』から「新生事件」へ、避けることが出来ないものとして背負わされた放縦の血による体験によって精神の自由が奪われ、死滅の危機にすら瀕するようになった状況において、そのことと格闘し、リモオジユで味わった宗教的気分も一助となって回復の兆しを掴み、まさにその牢獄を打ち破って出て行こうとする気力を獲得して帰国を可能にしていた過程と、しかし、帰国後も改めて「家」の牢獄に絡め取られている実感を強くせざるを得なかった中で、もう一度、今度は作品を通してリモオジユ体験を想起し、それをばねにして真にその牢獄を脱出して真の出発を可能にしていこうとしたその心理のすべてを「告白」していこうとしたのが『新生』における「告白」の真意であったといえるのである。

そして、その「告白」にいたる心の変革を促した要因の一つに、リモオジユで体験した宗教的気分を指摘したが、そのことは既に伊東一夫氏によって、

『新生』の本文のなかで、へ自分のたましひを預けて行く」とは、神に従うという信者本来の姿勢であり、へ「永遠」といふものに対し合つて居る」とは、神と交わるとか、神に出会う、神を感ずるといような信仰の神秘的極限を示している。⁽¹²⁾

と指摘されている通りであるが、このことと関連させうるのが、作中リモオジユからパリへ戻った岸本に、

言ひあらはし難い恐怖おそれと哀憐あわれみとは、節子の手紙を引裂いて焼捨て、しまった後まで岸本の胸に残った。(中略)
一度犯した罪は何故斯う意地悪く自分の身に付纏つて来るのだらう、(略)よくく不幸な節子のやうな姪がこの世に生きながらへて居ると思ふことを奈何することも出来なかつた。その悩ましさは、折角リモオジユの田舎の方で回復した新しい旅の心に掩おほ冠かぶさつて来た。(第一巻百十一)

というように強い罪の意識を感じさせていることである。岸本は妻が産後の出血で世を去った時から「愛を信ずるこ

とが出来」なくなり「信の無い心」に「墮ちて行った」（第一巻百二十七）と述懐しているように、節子との関係が生じた頃、彼は、他者特に女性を信じ愛する心を失っていた。先に引用したように、彼がフランスに渡った後も依然として岸本を頼りにしてしばしば手紙を書いてくる節子の気持ちを理解しようとせずむしろ「恐怖おそれをすら感」じるのもそうした心理に起因しているとも言えるのであるが、そう考えれば、リモオジュから戻った岸本の気持ちの変化、特に罪の自覚ということは見逃せない点であり、そこに伊東氏も指摘する宗教体験を認めることができるし、作者において言えば、『新生』における「告白」がそうした、宗教に促された「真」の心に響きあうものとして意識して描いていたことを推察できるところでもある。

そして『新生』における「告白」の意義を探る上でもう一点重要なのが、特に仏体験以後顕著に現われてくる藤村の「文明批評」への意識である。そのことを示唆するのが、『新生』に先立って書かれた『海へ』である。

藤村が青春時代から仰望していた海外へ初めて旅をして、日本という国を外から客観的に眺める機会を得ることによってそれまでの日本や、自らの「家」と「父」を見る眼差しが変ったことが『海へ』所収の紀行文から窺うことができる。例えば次のような文である。

・ 父上。私はあなたの黒い幻の船に乗つて、あなたの邪宗とせられ異端とせらるゝ教の国へ兎も角も無事に辿り着きました。この私の旅は恐らくあなたから背き去る行為であつたかもしれませぬ。(略) 私に取つては西洋はまだゞ黒船でございました。幻でございました。幽霊でございました。私はもつとその正体を見届けたいとぞんじました。そして自分の夢を破りたいとぞんじました。その心をもつて私は更に深く異郷に分け入り一筋の自分の細道を辿り行かうと致して居りました。(「地中海の旅」六)⁽¹³⁾

・ 左様だ、吾儕日本人はまだゞ保守的だ。吾儕に必要なことは国粹の保存でなくて、国粹の建設でなければ成らないのではないか。吾儕はもつとゞ欧羅巴から学ばねば成らない。(「故国に帰って」十七)⁽¹⁴⁾

・「僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及や土耳其あたりには古代と近代としか無い、と言つた人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の国には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりぢやない、僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思うよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆な封建時代から伝はつて来たものの近代化だ。(略)』

『(略) 不思議さねえ、遠い外国の旅に出て来て見ると、子供の時に別れた阿爺のことなぞがしきりと恋しくなる。僕等が今日あるのも、彼様して阿爺の時代の人達が頑張つて居て呉れた御陰だ、印度あたりのやうに外来の勢力に敗けてしまはなかつた御陰だ、左様思ふと僕はあの頑固な可畏しい阿爺に感謝するやうな心持を有つて来た。多少なりとも僕等が近代の精神に触れ得るといふのは、あの阿爺達に強いものが有つたからだ。』(「故国を見るまで」⁽¹⁵⁾ (以上、傍線筆者))

平田篤胤の国学に心酔し、尊皇攘夷思想を持つ父正樹の意思を守つて外国、特に西洋への旅を避けてきた藤村が、その「正体を見届けたい」という思いで渡仏したのだと意味づけたこの「地中海の旅」が、本来の渡仏の事情を捨象した形で示されていることは言うまでもないが、この『海へ』所収の文章では、「正体を見届けたい」と願っていた西洋に旅して、自らその西洋の中に立つて日本を眺めることによって、日本が「今日あるのは封建時代の賜物」だという事、そして「僕等が今日あるのも、彼様して阿爺の時代の人達が頑張つて居て呉れた御陰だ」ということを改めて実感したこと、そして一方では「吾儕日本人はまだまだ保守的」であり、「吾儕はもつともつと欧羅巴から学ばねば成らない」という認識を改めてすることが出来たことを、旅の成果として明確に示している。そのことが『新生』において、

・斯の侘しい冬籠りの中で、岸本の心はよく自分の父親の方へ帰つて行つた。しきりに彼は少年の頃に別れた父のことが恋しくなつた。(略) 四十四歳の今になつて、もう一度その人の方へ旅の心が帰つて行くといふことすら

不思議のやうに思はれた。(略) 岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた。(第一巻百十三)

・不思議にも斯の異郷の客舎で、岸本の心は未だ曾て行つたことの無いほど近く父の方へ行くやうに成つた。(中略) 父が生前極力排斥し、敵視した異端邪宗の教の国に来て、反つて岸本は父を視る眼をさへ養はれた。(略) 今になつて彼は古典の精神を持つて終始した父等が当時の愛国運動に参加したことや、学問から実行に移つたことを可成重く考へて見るやうに成つた。(第一巻百十九)

といったやうに、リモオジュ体験以後唐突な形で父を懐かしく想起し、父の存在を客観的に認識することによつて、自身の主体性と自由を獲得しようとしている姿勢が読み取れることとつながっていると見えよう。

『新生』で告白しようとした意図の一つに、そのやうに日本を旧と新に明確に区分けして、その新しい時代において意識しなければならない精神であり、あるいはそのことに対して主体性を持つて取り組んでいかなければならないということへの認識でありがあつたことを注目しなければならないが、そのこととははじめに引用した「芥川龍之介君のこと」の中で『新生』の目的は、「私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた」と記した藤村の言葉と符合するのである。

そしてもう一つ見逃せないのが、作中岸本に次のやうに認識させている点である。

未だ岸本は一切をそこへ曝け出してしまふ程の決心もつきかねて居たが、自分の苦しい出発点に遡つて根本から考へ直して掛らうとするには、どうしてもその心の声を否むことが出来なかつた。それをするには、いろいろな人が懺悔を書いた例に倣つて、自分も愚しい著作の形でそれを世間に公にしようと思へるやうに成つた。「あの事」を書いたら。そんなことは以前の彼には考えられもしなかつたのみか、成るべく「あの事」には触れまいとして節子から来た手紙は焼捨てるとか引裂いて捨てるとかした以前の彼の眼から見たら、まるで狂気の沙汰で

あつた。斯様なところへ岸本を導いたものは節子に対する深い愛情だ。

懺悔へ。岸本はどうして斯様な心に成れたらうと時々自分ながらびつくりすることも有つた。彼の心がその方向はうとした丈でも、何となく彼の歩いて行く路には新しい未来が感じられて来た。(第二卷九十三)

旧弊なへ家への論理においては、兄の進言に従つて一切を隠蔽し、世間の罰からへ家へと一族を守るべきであり、岸本もその選択に身を委ねてきた。その結果、旧弊な論理はまた代償として種々の呪縛を強いて、まず心の自由を圧迫し、牢獄意識を抱かせてきた。しかし、これから向うべき新しい時代においてはへ家への論理でなく個の自由解放に立つべきであり、それを可能にしていくのが愛の力であり確信であるということである。そして作品は更に、

岸本が待ち受けた夜明は、何もさう遠いところから白んで来るでもなく、自分の直ぐ足許から開けて行きそうに見えた。血から解き放され、肉から解き放されて行くことを感知する度に、暗かつた彼の心も次第に明るい方へ、明るい方へと出て行く思ひをした。(第二卷百二十四)

と続けている。「待ち受けた夜明け」は「自分の直ぐ足許から」、即ち個の再認識であり、それを促す愛の力によって実感することが出来るということを告げた箇所であるが、藤村が『新生』でなそうとした「告白」とは、まさに「事実」ではなく、その「事実」との格闘によって獲得された「真」を求める勇気であり、そこにこそ如何なる時代にあつても失うことの無い「真」の自由と解放があることの主張であつたといえよう。

註

- (1) 島崎藤村「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」(明治四二(一九〇九)年三月「秀才文壇」)「新片町より」『藤村全集』(筑摩書房、昭和四八(一九七三)年二月刊行開始)第六卷、一〇頁。
- (2) 芥川龍之介『或る阿呆の一生』(昭和二(一九二七)年一〇月)『芥川龍之介全集』(平成七(一九九五)年一月、刊行開始)第一六卷、六三頁。

- (3) 島崎藤村「芥川龍之介君のこと」「市井にありて」『藤村全集』第十三巻、五四頁。
- (4) 島崎藤村「芥川龍之介君のこと」、前掲書、五九～六〇頁。
- (5) 太宰治『女の決闘』（昭和一五（一九四〇）年一月～六月「月刊文章」）『太宰治全集』（筑摩書房、一九九八年七月）第四巻、二一五頁。
- (6) 太宰治「葉」（昭和九（一九三四）年四月「鶴」第一輯）『晩年』（昭和二一年六月）収録。『太宰治全集』第二巻、七頁。
- (7) 平野謙『島崎藤村論』五月書房、昭和三一（一九五七）年一月、八六～一〇三頁。
- (8) 島崎藤村「熱い汗と冷たい汗（大正七年の暮に）」「飯倉だより」所収、『藤村全集』第九巻、九二頁。
- (9) 細川正義「新生」の構造（『島崎藤村研究』第十二号、双文社出版、昭和五九（一九八四）年、二五頁）。
- (10) 島崎藤村『家』『藤村全集』第四巻、二五三頁。
- (11) 三好行雄「家」のためのノート」『島崎藤村論』至文堂、昭和四一（一九六六）年（『三好行雄著作集』第一巻、筑摩書房、平成五（一九九三）年七月）。
- (12) 伊東一夫「島崎藤村における信仰の構造」（『島崎藤村研究』第二十一号、双文社出版、平成五（一九九三）年八月）。
- (13) 『海へ』「地中海の旅」六、大正六年一〇月『藤村全集』第八巻、六三頁。
- (14) 『海へ』「故国に帰りにて」十七、大正五年九月『藤村全集』第八巻、一八〇頁。
- (15) 『海へ』「故国を見るまで」十一、大正七年四月『藤村全集』第八巻、一一三頁。

（本稿は、二〇〇七年八月二二日、下関マリンパークにおいて開催された日本キリスト教文学会九州支部夏季セミナーにて「文学」における「告白」Ⅱ」と題して、奥野政元氏の司会で、石井和夫、宮坂覺と行ったシンポジウムでの発題原稿を大幅加筆修正したものであることをお断りしておく。）